

# 旧天城トンネル

伊豆の踊子の舞台

## 永野光三

NAGANO Mitsuzo  
中央復建コンサルタンツ株式会社 / 取締役 / 東京本社長



「道がつづら折りになって、いよいよ天城峠に近づいたと思う頃、雨脚が杉の密林を白く染めながら、すさまじい早さで麓から私を追ってきた。」川端康成の名作「伊豆の踊子」の書き出しである。この小説の舞台となった天城峠は、伊豆の下田から三島に抜ける下田街道(現国道414号)の河津町と天城湯ヶ島町との町境にある。下田街道は、江戸時代末期に黒船来航と下田開港に伴って頻りに利用されるようになったため、明治26年から道路の改良が行われたが、途中の天城越えが最大の難所となっていた。そのため、明治33年に天城山隧道(旧天城トンネル)の建設が始まり、総工費103,000円(日雇い人夫の賃金比6.4万倍で換算すると現在の66億円に相当)の巨費と12人の尊い犠牲を払って、同38年に重厚な石造りのトンネルが開通した。

- ・名称：天城山隧道(旧天城トンネル)
- ・規模：全長446m、幅員4.1m(有効幅員3.5m)
- ・標高：708m

その後、旧天城トンネルは半世紀以上にわたって下田街道の要所として利用されることになる。初めて伊豆を訪れた19歳の一高生川端康成は、旅芸人の一行と道連れになった。康成が湯ヶ島からこのトンネルを抜けて下田までの旅をしたのは、大正7年11月の初めであった。昭和に入って、全長800mの新天城トンネルが開通(45年)してからは、旧天城トンネルを抜ける天城路は主にハイカーたちに利用されるようになった。ハイキング・コースは踊子歩道とよばれる16.2km(約5時間20分)の区間であり、このコースを旧天城トンネルから南に下れば、伊豆の踊子と学生の足取りをたどることができる。

伊豆急行の河津駅からバスで45分、新天城トンネルを抜けて水生地下で下車し、旧道を河津側に戻ると、もうそこからは伊豆の踊子の世界だ。途中、左に伊豆の



図 - 旧天城トンネル位置図

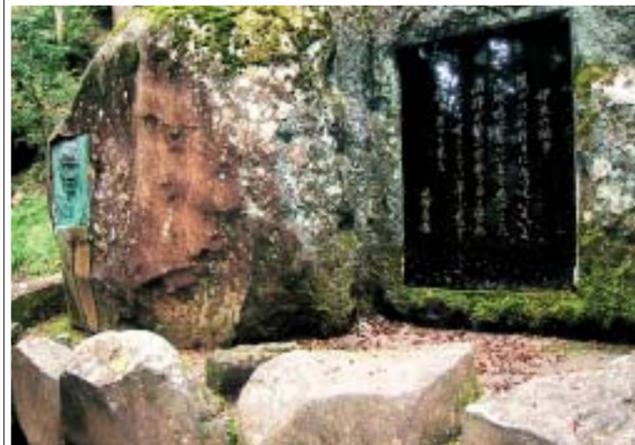


写真1 - 伊豆の踊子文学碑(水生地下)



写真2 - 蛇滝(河津七滝の1つ)

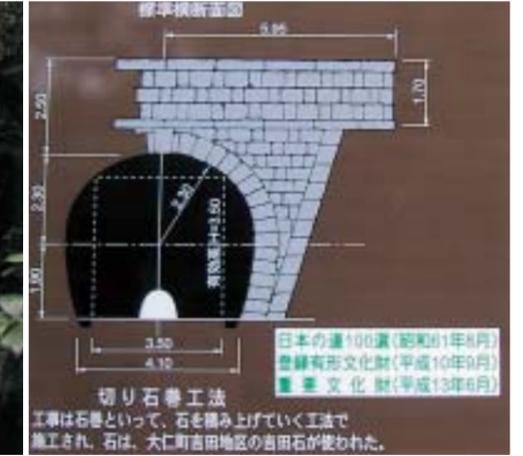


写真3 - 切り石巻工法(旧天城トンネル北口の看板)

踊子文学碑を見ながら30分も歩けば、旧天城トンネルの北口に到着する。トンネルの中にはわずかな照明があるが、足下が見えるほどには照らしてくれない。自分の足音がトンネル内でこだましてヒタヒタと追いかけてくのが不気味だが、5分もすれば南口に到達する。「伊豆の踊子」では、「暗いトンネルに入ると、冷たい雫がぼたぼた落ちていた。南伊豆への出口が前方に小さく明るんでいた。」と表現されている。トンネルを出て、河津川の清流に沿って杉の巨木の間を下っていくと、二階滝を経て河津七滝(釜滝、エビ滝、蛇滝、初景滝、カニ滝、出会滝、大滝)巡りができる。なお、ここのすべての滝は「タキ」と読まずに、水が垂れるということで、「ニカイダール」「カマダール」「エビダール」...という読み方をする。そしてさらに湯ヶ野まで戻ると、踊子の泊まった福田家に到着する。

旧天城トンネルは、大仁町の吉田石を使った石巻工法によっており、わが国に現存する石造道路トンネルの中で最大長を有する貴重な土木遺産である。さらに、坑門及びトンネル内部覆工の全体に及び切石積と両坑門の要所に施された多彩な石材加工には、精妙な技術が十分に発揮され、技術的完成度が高い。供用以来100年の時を経て、今なお息づく明治の知恵と職人技には今更ながら驚かされる。天城路は昭和61年8月に日本の道100選に選ばれて、その天城路の象徴的存在である旧天城トンネルは、平成13年6月にトンネルとしては初めて国の重要文化財に指定された。

- (写真：筆者)  
参考資料  
1)静岡県HP(<http://www.pref.shizuoka.jp/soumu/sm-13/>)  
2)静岡県の近代化遺産(静岡県教育委員会、2000年)  
3)日本の道100選(建設省道路局監修、ぎょうせい、1988年)  
4)天城路事情(土屋寛、新塔社、1978年)



写真4 - 旧天城トンネル南口(河津町側)